蟹と水仙の文学コンクール　入賞者　大賞作品

俳句部門（小学生の部）

大　賞

城崎小学校　六年　山　田　拓　斗

「水仙を　届けてあげたい　被災地へ」

奨励賞

城崎小学校　一年　森　下　音　和
織田小学校　六年　笠　川　可　音

佳　作

城崎小学校　二年　竹　内　瑞　葵
小山小学校　五年　中　嶋　智　香
織田小学校　六年　伊　藤　敦　基
城崎小学校　三年　堺　　みさき
城崎小学校　四年　矢　部　晴　己

俳句部門（中学生の部）

大　賞

朝日中学校　一年　福　田　美　空

「水仙を　祖母と探して　歩きけり」

奨励賞

朝日中学校　二年　齊　藤　有　未
越前中学校　二年　荒　木　太　一

佳　作

朝日中学校　三年　坂　井　美　空
越前中学校　二年　坂　口　天　将
朝日中学校　三年　中　上　裕　規
鷹巣中学校　一年　山　口　諒
松陵中学校　三年　島　田　佳　奈

俳句部門（高校生の部）

大　賞

仁愛女子高等学校　一年　仲　下　未　憂

「越前の　かにざんまいの　旅の宿」

奨励賞

仁愛女子高等学校　三年　稲　垣　智　誉
丹生高等学校　一年　青　山　未彩希

佳　作

仁愛女子高等学校　一年　斎　藤　真由香
仁愛女子高等学校　三年　泉　　桃　花
仁愛女子高等学校　三年　小　谷　恭　世
丹生高等学校　二年　和　田　麻　美
丹生高等学校　二年　竹　内　　大

俳句部門（一般の部）

大　賞

越前市　山　口　美智女

「独り居の　余生の贅や　せいこ蟹」

奨励賞

兵庫県　西村　さよいち
敦賀市　中　井　一　雄

佳　作

愛知県　小　原　あつ子
兵庫県　岩　間　康　之
福岡県　中　川　博　明
南越前町　米　野　道　雄
大阪府　塚　崎　てる子

詩部門（小学生の部）

大　賞

四ケ浦小学校　六年　大　江　一　成

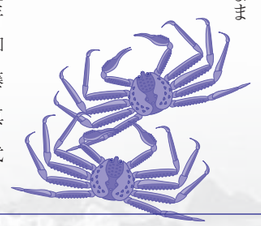
「かにに乗って」

歩くのがめんどうになったので
想像してみる。

山を歩き回っているかにをつかまえて
中に乗り込む。
コックピットにすわり、
家までのルートをセットする。
一直線で五分ちょっとと出る。
決定ボタンをおす。
ものすごい速さで
木や石が右から左に飛んでいく。
石の段差で小さなジャンプをして
おしりが痛くなる。
最悪のすわり心地のまま家に到着する。

乗り物よいのため、しばらくねこむ。
おやつを残す。
その日は遊べないまま
夜になってしまう。

結論。
自分で歩いた方が
一番得だとわかる。



奨励賞

糸生小学校　三年　加　藤　真　代
織田小学校　四年　森　崎　智　哉

佳　作

櫃原市立真菅北小学校　六年　大　枝　夏　希
さいたま市立仲町小学校　一年　堀　山　嘉　史
国高小学校　六年　山　口　梨　絵
城崎小学校　六年　田　川　　葵
城崎小学校　六年　山　田　拓　斗

詩部門（中学生の部）

大　賞

織田中学校　一年　田　中　麻　梨

「フラワーメモリー」

「おばあちゃん、ただいま。」
ひさしぶりに会った
私の手には、たくさんの水仙
それをおばあちゃんに渡して
仏壇の前に行く、一輪だけ持って
「帰ってきたよ。」
私が生まれる前に天国へ行ったおじい
ちゃんと
おばあちゃんに会いに行く
そうしてたら
「ただいま。」
皆が帰ってくると、テーブルの真ん中
に水仙をおく。
私が帰る時になると
持ってきた水仙がきれいに咲いて
私との思い出が
また一つ増えていく。

奨励賞

織田中学校　二年　上　田　勇　人
越前中学校　三年　氏　家　茉聖子

佳　作

米子市立美保中学校　三年　井　田　光　穂
朝日中学校　三年　冨　山　華　花
朝日中学校　三年　渡　辺　佑　紀
名田庄中学校　三年　河　原　慎　悟
織田中学校　一年　林　　祐　毅

詩部門（高校生の部）

大　賞

仁愛女子高等学校　三年　小　木　麻莉子

「水面へ」

どれだけ目をみはっても
到底かすんで見えない私
水たまり作ってどうするんだ
海にでもなるのかい

どれだけ耳をすましても
心の奥底は返事してくれない
ドクンドクンじゃ分からないよ
もすこしゆっくり生きてみたい

首をもたげて
水辺に座ってみても
やっぱりかすむ、遠くで耳鳴りひびく
本当の私
見えない私

もすこし背が高かったらよかったかい
もすこし色が白かったらよかったかい
うつしてくれたら本望だ
全部見えりゃあわけないよ

美しいナルキッソス
きみは水面にうつるその白を
ずっと見ていたのだろう

ずっと、見ていたのだろう

奨励賞

仁愛女子高等学校　二年　五十嵐　彩　乃
北陸高等学校　三年　酒　野　憲　幸

佳　作

仁愛女子高等学校　三年　川　崎　愛　華
仁愛女子高等学校　三年　寺　山　胡　桃
仁愛女子高等学校　三年　田　島　ありす
初芝橋本高等学校　二年　水　木　保　葉
丹生高等学校　二年　高　嶋　麻　貴

詩部門（一般の部）

大　賞

坂井市　水　谷　美枝子

「三つの袴」

シャッ　シャッ
羽織袴の男衆が
衣擦れの音と
箪笥の匂いを放ちながら
嫁どりの家に集まってくる

赤々と燃えている囲炉裏の鍋からは
おいしそうな匂いが立ちのぼり
女衆の笑いが　言葉がはじけている
やがてお座敷では
羽織袴の花婿と　うつくしい花嫁を囲んで
高お膳の御馳走を前に
にぎやかな宴が始まる
宴たけなわになると
『でられましょう』と言いながら始まる
にわかの　即興的で滑稽な歌や踊りは
テレビのない時代の
最大の楽しみであった

学校の帰り道
春先の
ときおり馬車が通る石ころ道の土手に
つくしを見つける
みんなが走り寄り
われさきにとつくしを摘むと
冠のような袴を
指でむしりとる
ショリ　ショリ　ショリ
口を動かすみんなの目が
笑っていた

家にお説教がある前日
母は　畑から　水仙をとってきた
「水仙を活けよう　長短をつけるため
　袴を　はきかえさせてのう」
母はそう言って　指先で
水仙の袴をそっともんでいく
袴が少し柔らかくなったころをみはからって
花のついている茎を静かにぬく
今までまとまっていた数本の葉っぱと
花が
ばらばらにくずれて
白い袴が　手の中にころがる
母は
水仙を元のように整えて短く切り
はずした袴をはかせた
パッン　パッン　パッン
私は
母に真似て　何本もはきかえさせると
丸くて真っ白い水盤に活けて
床の間に飾った

実家の畑の隅に
昔と同じように　今なお咲き続ける水仙の花
私は
両手に摘んだ水仙の甘い香りの中で
六十年近く前の私に
そして三つの袴に
なつかしさのあまり
思いっきり素敵な笑顔を送った

奨励賞

大阪府吹田市　槇　野　博
東京都武蔵野市　本　田　しおん
越前市　神　坂　　信

佳　作

岐阜県岐阜市　後　藤　　順
奈良県安堵町　小荷田　康太郎
福井市　斎　藤　しづ子
勝山市　竜　田　道　子
広島県呉市　木　塚　康　成